五輪と万博と私の研究(2)

愛知万博に先行して問題となったのが、伊勢湾の常滑沖に計画された中部国際空港である。常滑の住民を交えて、「中部新空港問題研究会」をつくり、空港問題を共同して調査研究した。1991 年 8 月末、土砂降りの雨のなか、関西新空港建設地の大阪府泉佐野市を現地視察した。

関西と中部、二つの新空港問題を軸にして、共同研究の成果を『国際化への空港構想』大月書店、1993 年 6 月として刊行した。私も編者の一人として、「空港建設の行財政問題」を執筆した。今これを書いていて、空港は関西が「先輩」であり、多くのことを学んだことを思い出す。2025 年大阪万博は、2005 年の愛知万博の経験から学ぶがことが多いはずだ。その点については次回以降で触れたい。

愛知万博について書きだすと、止まらなくなりそうだ。それで私が直接関わった万博アセスメントに絞って書きたい。愛知万博の会場予定地は当初、瀬戸市の里山「海上の森」であった。「海上の森」に何度も足を運んだが、ここで万博を開催することに抗議の声が広がっていった。地元住民や国内外の環境団体の抗議の輪が、BIE(博覧会国際事務局)を突き動かし、メイン会場が長久手の「愛知青少年公園」へ変更された。迷走を続けた愛知万博を象徴するものであった。

愛知万博は 1997 年 6 月 13 日、BIE 総会で日本・愛知への誘致が決まった。10 月に環境影響評価手法検討委員会が発足し、万博協会も設立された。こうしたなか、12 月に「愛知万博の環境アセスメントに意見する市民の会」がつくられ、私も世話人の一人として加わった。環境や法律の専門家、瀬戸市など多くの市民が参加して、万博アセスについて抗議と意見、提案を続けた。名古屋本山の生協会館会議室で、定期的に会議を開いて議論したことが忘れられない。学ぶことも多かった。

万博協会だけでなく、霞ヶ関の環境庁(当時)までメンバーが揃って出向き、アセスについて意見交換した。愛知万博はオオタカ営巣発見、新住宅市街地開発事業（新住事業）という万博跡地開発に対する BIE による激烈な批判により、会場変更を余儀なくされた。万博・新住事業などのアセスも、こうした動きに一定の役割を果たした。会場変更後の万博アセスは、駆け足アセスに終わってしまったが、大阪万博のアセスにも参考になることは多い。

中部新空港と愛知万博の調査研究については、拙著『公共事業と財政』高菅出版、2003 年、第 4 章「地域開発と公共事業」の 3「愛知県の大規模プロジェクトと財政危機」として収録している。

(2019 年 8 月 30 日)